

図書館だより

THE SHIGA UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

発行 平成12年2月1日

編集 滋賀大学附属図書館

電子文書概観

岩井 憲一

「図書館だより」の巻頭言を依頼され、誠に身に余る光栄であるが、私のような若輩者が、他の執筆者を差し置いて書くことになるとは思ってもよらず、皆様に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

さて、「図書館について何か書け」との依頼であるので、近年の電子図書館の流れから、本稿では「電子文書」について眺めてみたい。

「電子文書」という言葉は、インターネットの普及に伴い、従来の紙媒体の文書にかわる存在として、様々な研究がなされてきた。文書を電子化することにより、紙資源の浪費を防ぎ、いつでも過去の情報が手元で利用できるという利点がある。これを追求すると、本というものの存在が変わり、従来の書物の形をとらず、ブックリーダとよばれる読書ツールさえあれば、いつでも好きな本を読むことができるようになる。現にこの動きは、著作権切れの書籍を中心に行われつつある。この電子文書を支える技術としては、様々なものが開発されているが、本稿では次の2点に絞って眺めてみたい。

(1) PDF

まず、文字通り電子文書化のための技術としては、PDF (Portable Document Format) が挙げられる。PDFはAdobe Systems社が提唱した電子文書における表示規格であるため、このPDFファイルの作成ツールと閲覧用ツールに関しても、当然同社から提供されている。このうち作成ツールがAdobe Acrobatで、閲覧用ツールがAdobe Acrobat Readerである。PDFファイルは、Postscriptというプリンタ用記述言語で書かれたファイルから変換されて作られている（実は紙媒体の資料ですらPDFファイルに変換できるのだが）ため、Postscript本来の高印字品質をそのまま受け継いでおり、閲覧時の内容がそのまま印刷に反映する（WYSIWYG）ことができる。さらに、閲覧用ツールであるAdobe Acrobat Readerが、同社のホームページから無料で入手できることから、その利用者が爆発的に増えている。作成用ツ

ルであるAdobe Acrobatは有料であるが、ドラッグ&ドロップの操作でPDFファイルが容易に制作できること、またその最新版は、ホームページのようにリンクをつけることができたり、閲覧用のプラグインをインターネット用のブラウザにインストールすれば、そのブラウザから閲覧できるので、現在までに電子文書のデファクト・スタンダードになっている。

(2) XML

この電子文書をもう少し広い意味で眺めてみよう。印刷物まで考慮に入れなければ、従来のブラウジング用の記述言語である。HTML (Hyper Text Markup Language) で十分であるが、これをもう少し推し進めたのが、このXML (eXtensible Markup Language) である。XMLの最大の利点は電子データに構造を持たせることにある。形式は元のデータや文書をタグで囲むという従来のHTMLと同じであるが、そのタグが利用者が自由に定義可能なのである。こう聞くと、データにおける互換性の問題が考えられるが、本来はデータ構造の記述言語として生まれたものであることから、この場合はあらかじめそのデータ構造を公開しておけば、その問題はかなり軽減できると考えられる。

以上のように、電子文書を取り巻く技術は、急激な勢いで開発され、普及している。特にXMLはHTMLに代わる技術として注目されている。先にも述べたがXMLの基本コンセプトは、「データ（言葉）に意味を持たせる」ということにある。このことは、ワープロのような文書成形のような単純なものから、データの自動処理などまで様々な用途が期待できる。

今後、画像や音声などのマルチメディアデータについても様々な処理を容易に行うような記述ができれば、例えば、文系・理系という枠を越えたコラボレーションが期待できるのではないかと考えられる。

(教育学部講師 いわい けんいち)